

Title	男性保育士に対する態度とジェンダー・ステレオタイプとの関係： 保育士の専門性認識を高めるために
Sub Title	The relationship between attitudes towards male nursery school teachers and gender stereotypes : increasing recognition of expertise of nursery teachers
Author	矢野, 円都(Yano, Madoka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2020
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.144 (2020. 3) ,p.219- 238
JaLC DOI	
Abstract	<p>As the number of male nursery school teachers increases, there are some parents who do not want their daughter's clothes to be changed by the teacher. In this study, we investigate whether the attitude of denying male teachers from taking care of female children is correlated to gender stereotypes and a lack of recognition of expertise. The results of a questionnaire survey found that many people had a negative opinion about nursery school teachers taking care of students of the opposite gender. In particular, with respect to care involving the removal of clothing, more people were of the opinion that male teachers should not care for students of the opposite gender than those who felt the same about female teachers. People who felt that female teachers could care for male children, but male teachers should not care for female children, had stronger perceptions of gender roles than those who either allowed or denied care for students of the opposite gender regardless of the teachers' gender. Further, a negative correlation was observed between perception of gender role division and recognition of expertise of nursery school teachers. We argue the necessity of gender equality in childcare settings and investment in preschool education to prevent gender stereotyping and to increase recognition of the teachers expertise.</p> <p>わずかではあるが男性保育士が増えつつある中、娘の着替えを男性保育士にさせないでほしいといった要求を保育園にする保護者が出てきており、社会問題となっている。本研究では、男性保育士が女兒の世話をすることに対する否定的な態度が、ジェンダー・ステレオタイプや保育士の専門性の認識の欠如と関連してい</p>

	<p>るかどうかを検討した。質問紙調査の結果、保育士が異性園児の世話をすることについて否定的な考えを示す人も多く、特に、衣服を脱がせる行為を伴う世話の場合は、女性保育士と比べて、男性保育士が異性園児の世話をすることを否定する意見が多かった。女性保育士が男児の世話をすることは肯定するが、男性保育士が女児の世話をすることは否定するという人は、保育士の性別にかかわらず異性の園児の世話をすることを肯定もしくは否定する人と比べて、性別役割分業を肯定する傾向があることが示された。さらに、性別役割分業を肯定する人ほど、保育士の専門性認識が低いという相関もみられた。ジェンダー・ステレオタイプの再生産を防止し、保育士の専門性認識を高めるために、就学前教育への投資を増やし、就学前教育における男女共同参画を促進することの重要性を議論する。</p>
Notes	<p>特集：伊東裕司教授 退職記念号 寄稿論文</p>
Genre	<p>Journal Article</p>
URL	<p>https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000144-0219</p>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

男性保育士に対する態度と
ジェンダー・ステレオタイプとの関係
～保育士の専門性認識を高めるために～

— 矢 野 円 郁*

**The Relationship between Attitudes towards
Male Nursery School Teachers and Gender Stereotypes:
Increasing Recognition of Expertise of Nursery Teachers**

Madoka Yano

As the number of male nursery school teachers increases, there are some parents who do not want their daughter's clothes to be changed by the teacher. In this study, we investigate whether the attitude of denying male teachers from taking care of female children is correlated to gender stereotypes and a lack of recognition of expertise. The results of a questionnaire survey found that many people had a negative opinion about nursery school teachers taking care of students of the opposite gender. In particular, with respect to care involving the removal of clothing, more people were of the opinion that male teachers should not care for students of the opposite gender than those who felt the same about female teachers. People who felt that female teachers could care for male children, but male teachers should not care for female children, had stronger perceptions of gender roles than those who either allowed or denied care for students of the opposite gender regardless of the teacher's gender. Further, a negative correlation was observed between perception of gender role

* 神戸女学院大学 人間科学部

division and recognition of expertise of nursery school teachers. We argue the necessity of gender equality in childcare settings and investment in preschool education to prevent gender stereotyping and to increase recognition of the teachers expertise.

Key words: gender stereotypes, gender role division, nursery school teachers, gender-equal society, preschool education

わずかではあるが男性保育士が増えつつある中、娘の着替えを男性保育士にさせないでほしいといった要求を保育園にする保護者が出てきており、社会問題となっている。本研究では、男性保育士が女兒の世話をすることに対する否定的な態度が、ジェンダー・ステレオタイプや保育士の専門性の認識の欠如と関連しているかどうかを検討した。質問紙調査の結果、保育士が異性園児の世話をすることについて否定的な考えを示す人も多く、特に、衣服を脱がせる行為を伴う世話の場合は、女性保育士と比べて、男性保育士が異性園児の世話をすることを否定する意見が多かった。女性保育士が男児の世話をすることは肯定するが、男性保育士が女兒の世話をすることは否定するという人は、保育士の性別にかかわらず異性の園児の世話をすることを肯定もしくは否定する人と比べて、性別役割分業を肯定する傾向があることが示された。さらに、性別役割分業を肯定する人ほど、保育士の専門性認識が低いという相関もみられた。ジェンダー・ステレオタイプの再生産を防止し、保育士の専門性認識を高めるために、就学前教育への投資を増やし、就学前教育における男女共同参画を促進することの重要性を議論する。

キーワード：ジェンダー・ステレオタイプ、性別役割分業、保育士、男女共同参画社会、就学前教育

問 題

1999年に「保育士」という名称に変更される以前、その資格は「保母」という名称で呼ばれていたように、保育士は女性の職業と認識されてきた。保育士資格が国家資格となったのは2003年であり、その後、男性保育士は徐々に増えつつあるが、2013年でもわずか4%にとどまっている(厚生労働省, 2015, p. 11)。2017年1月に千葉市は「男性保育士活躍推進プラン」を策定し、男性の保育士が市立保育所で働きやすくなるよう環境

を整える計画を立てた（千葉市，2017）。その背景には，保育所や幼稚園が，女児の保護者からの要請に対応して，女児の着替えやおむつ替えを男性保育士にはさせないという対応を迫られるという実態があった（朝日新聞，2017）。男性保育士が女児の着替えなどの世話をすることについての議論は，それ以前からあったようであるが（アエラ，2013a, b；今津，2018, p. 25），2017年に千葉市長がツイッター上でこのことを問題視する発言を行ったことによって，SNS（Social Networking Service）上でも賛否両論の反応があり，各種メディアで大きく取り上げられた（毎日新聞，2017b）。

「男性保育士に娘の着替えをしてもらいたくない」という保護者の主な理由は，自分の娘が性犯罪の対象となる可能性があるということである。実際に，（女性保育士と異なり）男性保育士による園児への強制わいせつ事件は起きている。したがって，男性保育士に対するそのような疑念や負の感情を真っ向から否定することはできないが，一方で，真面目に働いている男性保育士にとっては大変心外な疑念であり，保育士不足に拍車をかける大問題である。一般的に，女性よりも男性による性犯罪の方が圧倒的に多く，保育士同様に国家資格である医師においても，男性医師による性犯罪が時折起きているが，（産科・婦人科でさえ）医師界から男性を排除する意見は聞かない。男性医師と男性保育士に対する世間の態度が異なる理由として，マイノリティ（少数派）は偏見をもたれやすいという一般的なステレオタイプの形成メカニズムと，各職業に対する「専門性」の認識の違いが挙げられる。

男性保育士が女児の世話をすることを否定する態度を示すのは，実際に男性保育士と接したことがない人が多く，接する機会が増えることによって偏見がなくなるという可能性を，千葉市長も指摘しているが（毎日新聞，2017a），一般的に，マイノリティは偏見をもたれやすいことが心理学的な研究で実証されている（レビューとして，池上，1995）。集団に対す

る印象は、集団内の目立つ事例に基づいて形成されることが多いが、集団内で相対的に正規頻度の低い事例は顕在性が高くなると考えられ、集団自体の顕在性も集団の規模が小さいほど高いため、顕在性の高い小集団の成員が、顕在性の高い正規頻度の低い行動をとれば、二重に目立ち、その行動がその集団の特徴として認知されやすい。正規頻度の低い行動には、ポジティブなもの（望ましい行動）とネガティブなもの（望ましくない行動）の両方があるが、対人印象形成過程において、ポジティブな事象よりもネガティブな事象から受けるインパクトの方が強いというネガティブティ・バイアスがあるため、ステレオタイプは否定的になりやすいことが指摘されている（池上，1995）。このようなステレオタイプの形成メカニズムを踏まえると、保育士の中で極めてマイノリティである男性保育士集団の成員が、たとえば子どもを虐待するといった極めて顕在性が高くネガティブな事件を起こすと、「男性保育士は（女性保育士よりも）子どもを虐待する可能性が高い（ため、保育士に向いていない）」といった否定的なステレオタイプ（偏見）が生じるのも、ある意味やむを得ないことではある。しかし、あくまでそれはステレオタイプであり、個々の男性保育士が虐待事件を起こす可能性があるということを意味しない。

このように、男性保育士一般に対して偏見をもってしまうというだけでなく、実際に子どもをよく世話している目の前の男性保育士に対してさえも、無遠慮に娘の着替えをしないよう要求できてしまうというのは（アエラ，2013a）、保育士に対して、職業的専門性を評価していない（医師と同様に国家資格を有する人であるという認識が低い）といえよう。もちろん、医師に世話になる場合においても、女性が、女性医師のいる病院や診察日を選んで診察を受けるということはよくあることであるが、目の前の男性医師に対して、直接的に診察行為に制限を加えたり、女性医師への交代を要求したりすることはないのであろう。保育士の専門性を評価していないのは、娘の着替えを拒否する保護者だけではない。日本では保育士の給

料が極めて低いという実態は、日本社会全体が、その専門性を高く評価していない証と考えられる。日本では、義務教育である小中学校の教員の給料も低いが、それと比べても保育士の給料はさらに低い。給料の低さは、保育士が離職する主要な理由の一つである（東京都福祉保健局，2019, p. 116）。子どもの年齢が下がるほど、その世話や教育には技術や労力を要するということが日本では認識されていないようである。ツイッターなど、SNS 上で発信される個人の意見をみても、「保育士の仕事は誰でもできる（だから給料が低くてもよい）」と思っている人は少なくない。

保育士の仕事が安く見積もられるということは、家庭における育児という労働の価値も低く見積もられているということであろう。家庭で乳幼児の世話を担っているのも、日本では多くの場合主に母親（女性）であり、育児のみならず、家事や介護といった主に女性が担ってきた労働に対する評価は全般的に低く、それらが「労働」とあるという認識さえ低い。実際、中学校の公民の教科書の中には、「家事は生活の喜びや家族のきずなを生み出す源」「お金にならないというより、お金でははかれぬほど大事な価値をもった仕事」といった表記がなされているものもあり（育鵬社，2016, p. 67）。家庭の中で女性が行う労働を「きずなを生み出す源」と強調することで無償の貢献を求め、家事がもつ労働としての側面を隠そうとする意図が指摘されている（竹信，2013, p. 107）。

保育士が異性の園児の世話をすることを否定する態度や、保育士の専門性を低く評価する態度には、どのような要因が関連しているであろうか。育児経験のない人（自身に子どもがいても育児を担ってこなかった人を含む）が育児負担を軽く見積もるのであるだろうか。実際に育児中の母親が、娘の着替えを男性保育士が世話することに否定的な態度を示すという先述の実例を踏まえると、育児経験以外にも重要な要因があると考えられる。たとえば、育児（や家事）は女性がすべきであるとか（性別役割分業観）、母親になることが女性の幸せであるといったような考え（“母性愛” 信奉）

は、男女問わず持っている人がいるが、このようなジェンダー・ステレオタイプが、育児や保育という労働に経済評価を与えることを阻んでいるという可能性が考えられる。1980年代のアメリカで共働き家庭の育児・家事分担を調査したホックシールド (Hochschild, A. R.) の研究では、性別役割分業観が強く、妻の就労に反対する夫の家事への抵抗感が示されており、妻が働くのは自分の収入が低すぎるからだと感じ、その上家事もすると二重にプライドが傷つけられる (家事をすること自体がプライドを傷つける) と考え、家事をしないという夫がいることが報告されている (久保, 2009)。現代の日本のフルタイム就業夫婦を対象とした調査研究 (久保, 2009) でも、性別役割分業を肯定する男性ほど、家事への抵抗感が強く家事分担度が低いことが示されているが、これらの研究結果から、家事や育児の価値を評価する態度に、ジェンダー・ステレオタイプが関係していることが推測される。

本研究では、実際にまだ育児を経験したことがない若年女性 (女子大学生) を対象に、保育士に対する態度やジェンダー観を調査し、男性保育士が女児の世話 (特に、着替えやトイレの世話) をすることを否定する態度が、保育士の専門性の認識の欠如や、ジェンダー観と関連しているかどうかを検討することを目的とする。保育士の仕事は、誰でもやればできるといったように、専門性を低く認識している人や、育児は女性 (母親) の仕事であるといった性別役割分業観や“母性愛”を信じる傾向が強い人ほど、男性保育士に対して否定的な態度を示しやすいかどうか、また、性別役割分業観や“母性愛”を信じる傾向が強い人ほど、保育士の専門性の認識が低いという関連がみられるかどうかを検討する。さらに、男性保育士と接する機会が、男性保育士に対する偏見を減少させるかどうかを検討するため、男性保育士と接した経験の有無で保育士に対する態度やジェンダー観が異なるかどうかを確認する。

方 法

調査対象者

某女子大学の2～4年生103名を対象とした。このうち、全項目に対して同一の番号に○をつけた回答者1名と、半数以上の項目が無回答であった回答者1名のデータを除外したため、有効回答数は101名（平均年齢 19.85 ± 0.99 歳）であった。101名のうち、一部の項目に記入漏れがあった3名については、記入漏れのなかった尺度の得点のみ分析に使用した。

調査時期

本調査は2017年7月に行われた。

調査項目

(1) 異性園児に対する保育士の世話の是非 男性および女性保育士が異性の園児に対する世話（着替え、食事の介助、オムツの交換、トイレの介助、寝かしつけ）を行うことの是非について、それぞれ「1. 良くない」「2. どちらかという良くない」「3. どちらともいえない」「4. どちらかという良いと思う」「5. 良いと思う」の5件法で尋ねた。男性保育士と女性保育士の質問順序はカウンターバランスをとった。

(2) 保育士の専門性認識 保育士が専門職であるという認識の程度を以下の3つの質問項目で評価した。①20～24歳の女性保育士の月給平均が188,200円（同年齢の女性銀行員の月給平均が218,300円）であることを提示し、保育士の給料が妥当だと思うかどうかを、「1. 低すぎる」「2. やや低い」「3. 妥当である」「4. やや高い」「5. 高すぎる」の5件法で尋ねた。②保育士の仕事は誰にでもできる仕事だと思うかどうかを、「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. ややそう思う」「4. そう思う」の4件法で尋ねた。③保育士には専門的な知識やスキルが必要だと思うかどうかを、「1. 高度な知識やスキルは全く必要でない」「2. 高度な知識や

スキルはあまり必要でない」「3. ある程度高度なスキルや知識が必要である」「4. 非常に高度なスキルや知識が必要である」の4件法で尋ねた。

(3) ジェンダー観 回答者のジェンダー観を測定するため、鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版15項目と、江上（2007）の「母性愛」信奉傾向尺度13項目を用いた。回答方法は「1. ぜんぜんそう思わない」から「5. まったくそのとおりだと思う」の5件法であった。平等主義的性役割態度の得点の値の範囲は15から75であり、得点が高いほど平等主義的であることを意味する。「母性愛」信奉傾向の得点の値の範囲は13から65であり、得点が高いほど「母性愛」を信じる傾向が強いことを意味する。

(4) 就学前教育における経験 保育園や幼稚園に通っていたかどうか、および、その際、男性の先生がいたかどうかを尋ねた。

調査方法

心理学の講義の時間（最後の約15分）を用いて、集団で行われた。回答は無記名で行われ、講義の成績とは無関係であること、参加は任意であることが伝えられた。

結果

異性の園児に対する保育士の世話についての評定値の平均と標準偏差（SD）をTable 1に示す。各項目の値の範囲は1から5であり、数値が低いほど、異性の園児に行くことに問題があると認識されていることを意味する。女性保育士においては、全項目で平均値が4を超えており、男児の世話をすることに問題があると思う人は少ないことがわかる。一方、男性保育士においては、衣服の脱着に関わる行為の3項目において4を下回っていた。世話の種類によって、男性保育士と女性保育士の評定値に差があるかどうかを調べるため、世話の種類5×保育士の性別2の2要因（被験

者内要因)の分散分析を行ったところ, 両主効果(世話の種類 $F(4,400) = 78.0, p < .001$; 保育士の性別 $F(1,100) = 71.8, p < .001$) および交互作用 ($F(4,400) = 42.5, p < .001$) が有意であった. 世話の種類の主効果における多重比較の結果, 「食事の介助」と「寝かしつけ」の間, および「オムツの交換」と「トイレの介助」の間には差がなく, それ以外の項目間には有意な差がみられた ($p < .05$). さらに, 交互作用における単純主効果について, 男性保育士における世話の種類の効果は, 全体の主効果の多重比較の結果と同一であり, 女性保育士における世話の種類の効果は, 「食事の介助」と「寝かしつけ」の間, および「着替え」と「オムツの交換」と「トイレの介助」の3項目の間には差がなく, それ以外の項目間には有意差がみられた ($p < .05$). また, 保育士の性別によって差が見られた世話の種類は, 「着替え」と「オムツの交換」と「トイレの介助」の3項目であった ($p < .001$). そこで, 保育士の性別による差が特に大きかったこの3項目の得点を合計した値を, 各回答者の男性保育士および女性保育士に対する「異性園児世話は認」得点として算出し (Fig. 1), その平均とSDをTable 1に示した. 女性保育士に対する得点は, 半数以上の人(53%)が15点満点と評価しているのに対し, 男性保育士に対する評価は最低点の3点から15点まで分散しており, 15点満点と評価した人は24%にとどまった.

Table 1 異性園児に対する世話の是非に関する評価 ($n=101$)

	男性保育士		女性保育士	
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
着替え*	3.72	1.14	4.49	0.86
食事の介助	4.82	0.45	4.85	0.43
オムツの交換*	3.50	1.27	4.38	0.94
トイレの介助*	3.50	1.24	4.34	0.91
寝かしつけ	4.76	0.55	4.85	0.41
異性園児世話は認	10.71	3.37	13.20	2.49

*保育士の性別によって差がみられた項目

男性保育士に対する態度とジェンダー・ステレオタイプとの関係

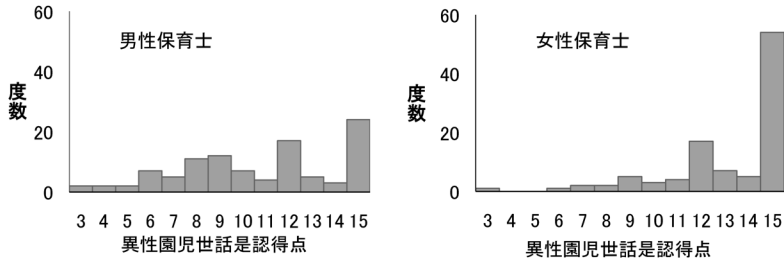


Fig. 1 異性園児世話は認得点の度数分布

保育士の専門性に関する質問については、①保育士の給料が「高い」あるいは「高すぎる」と回答した人は皆無であり、「妥当」とした人は10人(10%)であった。②保育士の仕事は誰にでもできるかどうかについて、「そう思う」と回答した人は皆無であったが、「ややそう思う」は7人(7%)いた。③保育士には専門的な知識やスキルが「全く必要ない」と回答した人は皆無であったが、「あまり必要でない」と回答した人は12名(12%)いた。①と②の得点を逆転させ、3項目の得点を合計したものを、各回答者の「保育士の専門性認識」得点とした。得点の値の範囲は3から13であり、得点が高いほど、保育士の仕事の専門性を高く評価していることを意味する。この得点の101名の平均値(SD)は10.60(1.28)であった。

平等主義的性役割態度の尺度については、2名が無回答であったため、99名分のデータを用いた。その平均値(SD)は55.75(8.03)であった。「母性愛」信奉傾向については、1名が無回答であったため、100名分のデータを用いた。その平均値(SD)は41.49(8.39)であった。

次に、これらの尺度間の相関係数を Table 2 に示す。異性園児世話は認得点と他の尺度の間には有意な相関はみられなかった。保育士の専門性認識、性役割態度、「母性愛」信奉傾向の間には有意な相関がみられ、性役割が平等主義的な人ほど「母性愛」信奉傾向が低く、保育士の専門性を高

Table 2 尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5
1. 異性園児世話是認 (男性保育士)		.56**	.09	.09	-.09
2. 異性園児世話是認 (女性保育士) (101)	(101)		.04	-.07	.05
3. 保育士の専門性認識 (101)	(101)	(101)		.31**	-.18 [†]
4. 平等主義的性役割態度 (99)	(99)	(99)	(99)		-.65**
5. 「母性愛」信奉傾向 (100)	(100)	(100)	(100)	(98)	

※ () 内の数値は分析に用いたデータ数 ** $p < .01$ [†] $p < .10$

く評価していた。

男性保育士と女性保育士に対する異性園児世話是認得点の間には強い正の相関がみられたが、両得点の分布には偏りがあり、特に、女性保育士に対する得点については、半数以上が満点をつけている (Fig. 1)。そこで、女性保育士と男性保育士のどちらに対する異性園児世話是認得点も高い人 (是認群)、女性保育士の得点のみ高く、男性保育士の得点が低い人 (男性保育士否認群)、どちらに対する得点も低い人 (否認群) の3群に分け、各尺度得点の群間比較を行う。なお、同一回答者の女性保育士に対する評価と男性保育士に対する評価の差の分布を Fig. 2 に示す。両性の保育士に対して15点満点をつけた24名を是認群、女性保育士には15点満点をつけ、かつ男性保育士には11点以下 (4点差以上) をつけた17名を男性保育士否認群 (差分の平均値は6.8)、両性ともに11点以下をつけ、かつ両性の差分が3点以下の14名を否認群とした。各群の保育士の専門性認識、平等主義的性役割態度、および「母性愛」信奉傾向の平均値 (SD) を Table 3 に示す。各尺度得点について群間差があるかどうかを調べるため、1要因の分散分析を行った。その結果、保育士の専門性認識および「母性愛」信奉傾向の得点については、有意な群間差はみられなかった (順に $F(2, 52) = 0.07, ns$; $F(2, 51) = 1.42, ns$)。平等主義的性役割態度の得点においては群間差の傾向がみられ ($F(2, 51) = 2.84, p = 0.07$)、多重比較を行ったところ、男性保育士否認群の得点は是認群よりも有意に低く ($p < .05$)、

男性保育士に対する態度とジェンダー・ステレオタイプとの関係

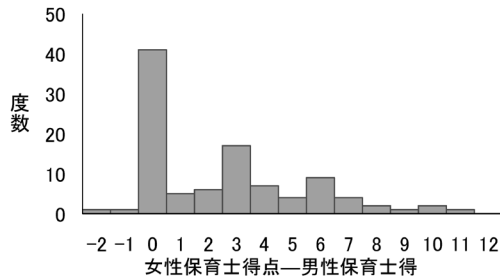


Fig. 2 女性保育士と男性保育士の園児世話是認得点の差分の度数分布

Table 3 保育士に対する態度別の各群における尺度得点の平均

	容認群 (<i>n</i> =24)		男性保育士否認群 (<i>n</i> =17)		否認群 (<i>n</i> =14)	
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
専門性認識	10.88	1.27	10.82	0.98	10.71	1.58
性役割態度 [†]	57.67	5.89	52.06	9.39 [#]	57.43	7.75
「母性愛」信奉	41.92	7.45	45.35	7.42	40.69	9.13 [#]

[#] 欠損値 1 名

かつ拒否群よりも低い傾向がみられた ($p=0.07$)。

回答者自身が、保育園や幼稚園に通っていたかどうかについては、保育園が 19 名、幼稚園が 70 名、その他が 12 名であった。また、保育所や幼稚園に通っていた際に、男性の先生がいたかどうかについては、いたと答えた人が 33 名、いなかったと答えた人が 66 名、2 名が無回答であった。幼児期に男性の先生と接する機会があった人の方が、男性保育士に対する態度が肯定的であるという可能性や、ジェンダー観が平等主義的であるといった可能性を検討するため、男性の先生がいたと答えた人といなかったと回答した人で、各尺度の得点に差があるかどうかを検討した (Table 4)。*t* 検定の結果、男性保育士の異性園児世話是認、保育士の専門性認識、平等主義的性役割態度においては、有意な群間差はみられなかった。「母

Table 4 男性の先生がいたかどうかの群分けによる尺度得点の平均

尺度	男性の先生	<i>n</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>t</i> 値
異性園児世話是認 (男性保育士)	いた	33	11.18	3.83	0.87
	いない	66	10.56	3.09	
専門性認識	いた	33	10.33	1.05	1.57
	いない	66	10.73	1.39	
性役割態度	いた	32	54.94	6.31	0.72
	いない	65	56.06	8.92	
「母性愛」信奉	いた	33	43.67	7.88	1.78 [†]
	いない	65	40.48	8.66	

† $p < .10$

性愛」信奉傾向においてのみ、男性の先生がいた人の方が「母性愛」信奉傾向が強いという傾向がみられた。

「母性愛」信奉傾向については、予想と逆の傾向がみられたが、男性の先生がいたと答えた人のほとんどが幼稚園に通っていた人であったため、保育園に通っていた人と幼稚園に通っていた人の違いである可能性を検討した。*t*検定の結果、幼稚園に通っていた人(42.21)の方が、保育園に通っていた人(39.00)よりも「母性愛」信奉傾向が強い傾向がみられた($t(86)=1.45, p=0.08$)。なお、その他の尺度得点においては、保育園と幼稚園に通っていた人の中で、有意な差は見られなかった。

考察

本研究の主な目的は、男性保育士が女児の世話をすることに対する否定的な態度が、保育士の専門性の認識の欠如や、ジェンダー観と関連しているかどうかを検討することであった。女子大学生を対象とした質問紙調査の結果、保育士が異性の園児の世話をすることについて否定的な考えを示す人も多く、特に、着替えやおむつ交換、トイレの介助といった、衣服を脱がせる行為を伴う世話の場合、女性保育士と比べて、有意に男性保育

士が異性園児の世話をすることを否定する意見が多かった (Table 1, Fig. 1)。異性園児の世話をすることに対する態度と、保育士の専門性認識やジェンダー観が関連しているかどうかを調べた結果、保育士の専門性の認識とは関連性がみられなかったが、性役割態度との関連性が示唆された (Table 3)。女性保育士が男児の世話をすることは肯定するが、男性保育士が女児の世話をすることは否定するという人は、保育士の性別にかかわらず異性の園児の世話をすることを肯定する人や、保育士の性別にかかわらず異性の園児の世話をすることを否定する人と比べて、性別による役割分業を肯定し、育児・家事を女性の仕事であると考える傾向がみられた。さらに、性役割態度がステレオタイプ的である人ほど、保育士の専門性認識が低いという相関もみられた (Table 2)。

これらの結果から、育児 (や家事) は女性がすべきであるといったようなジェンダー・ステレオタイプは、本研究の調査対象である若い世代にも根強くあることがわかり、そのようなステレオタイプの強い人は、男性が育児にかかわることに抵抗を感じているという可能性が示唆される。育児は女性がすべきであるというステレオタイプの思考は、女性であれば誰でも育児に向いているという認識につながり、ひいては、育児は誰にでもできる単純な仕事であるといった誤解をもたらしうると考えられる。保育士は、家庭内だけで子どもの面倒を見切れない保護者の代わりに保育をするというのがその業務であるため、“お母さん” (一般の保護者) が日々行っていることを代行しているのであり、一般の保護者がしていることができればよいだけ、したがって、専門的な技術や知識は必要ない、といった誤解をする人も少なくないのであろう。しかし、実際には (自分の子どもの育児でさえ容易なことではないが、それ以上に) 自分の子ではない乳幼児を複数人同時に保育するという事態は、一般の保護者が行っている育児以上の複雑な事態であり、その事態に適切に対処するための高度なスキルや適性が保育士には求められる。保育士たちは日々、他人の子どもたちに対

してわが子のように愛情をもって接することで信頼関係を築き、大人の言葉が通じない子どもたちと意思疎通を図り、その命を守るだけではなく成長を促進する、といった極めて重大かつ困難な仕事をしている。保育士（や幼稚園教諭）は、学校教育における教師の役割と同様に重要な役割を担っており、さらに子どもの年齢が低いほど、その保育や教育を全うするための技術は高度になる。しかし、残念ながら、今の日本社会でそのことは常識にはなっていない。

また、実際に男性保育士と接する経験があることによって、マイノリティである男性保育士に対する否定的態度が減少するかどうかについても検討したが、男性の保育士や幼稚園教諭がいたと回答した人といなかったと回答した人で、男性保育士の異性園児世話は認得点に違いはみられなかった。本調査では、男性の先生がいたと回答した人が少なかったことや、いた場合でも、その先生とどの程度かかわりを持ったかなどの詳細（園長だけが男性だったのか、自分の担任が男性だったかどうかなど）を確認していないため、今後はより詳細な調査で、男性保育士に対する偏見が、接触経験によって防止できるか否かを検討する必要がある。

さらに、異性園児世話は認得点以外の尺度についても、男性の先生がいた人といなかった人の間で違いがみられるかどうか調べた結果、予想とは逆に、男性の先生がいたと答えた人の方が、「母性愛」を信奉する度合いが強い傾向がみられた。しかし、この結果は、男性の先生と接する機会があったことで、男性にはない「母性愛」なるものの存在を信じるようになったということを意味するものではなかった。男性の先生がいたと答えた人のほとんどが、保育園ではなく、幼稚園に通っていた人であり、保育園に通っていた人よりも、幼稚園に通っていた人の方が、「母性愛」を信奉する度合いが強いという傾向も確かめられた。母親が専業主婦である割合は、保育園に通っていた人よりも、幼稚園に通っていた人の方が多いと考えられる。したがって、これらの結果のより妥当な解釈は、母親も就労

している家庭では、母親が専業主婦である家庭よりも、父親（男性）が育児（や家事）に関わることが多いと考えられ、父親が育児をする姿をみる機会が多かった人ほど、（男性にはない）「母性愛」というものを信じる傾向が低くなるという解釈である。この解釈の妥当性についても、よりサンプル数を増やすとともに、父親の育児のかかわりに関する詳細を調査したうえで再検討する必要があるが、ジェンダー・ステレオタイプ（スキーマ）は乳幼児期から形成されるため（e.x., Golombok, & Fivush, 1994 小林・瀧野訳, 1997; 作野, 2008）、幼い自分の世話をしてくれる人が、女性ばかりであると育児は女性がするものであるという認識が形成されてしまうと考えられる。幼児期の子どものジェンダー観は非常にステレオタイプの的であり（Martin, 1989）、それを補強（助長）したり緩和（修正）したりするという点で、幼児期の経験は非常に重要である（青野・金子, 2008）。ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のためにも、乳幼児期から保育に関わる男性の姿を見るという経験をすることは非常に重要であるが、共働き家庭が増え、夫婦の所得の平等化が進んでも、男性（夫）の家事・育児時間の増加は少ないのが現状である（筒井, 2014; 山田, 2018; 山口, 2017）。その意味でも、積極的に男性の保育士や幼稚園教諭を増やし、公的な保育・教育の場で男性のかかわりを増やす必要があるといえる。そうすることによって、育児や家事を女性がすべきといったジェンダー・ステレオタイプをもつ人は減っていくであろう。

子どもたちの命を守り育てる保育士の仕事の価値が認められ、保育士の給料が上がると、男性保育士も増え、育児は女性がするものというステレオタイプがなくなる社会にするための方策としては、一つは、千葉市が取り組んでいるように（千葉市, 2017）、行政が積極的に男性保育士を増やす施策を打って出ることであろう。このような施策を促進するためには、一般市民が、このような取り組みの重要性を認識する必要があるが、千葉市長の発言に対しても賛否両論あったこと（毎日新聞, 2017b）からもわかるよ

うに、マイノリティである男性保育士に対する偏見や育児は女性の方が向いているといったようなジェンダー・ステレオタイプは根強い。我々一般市民に必要なことは、「人はマイノリティに対して偏見を持ちやすい」という人間の一般的な認知傾向を自覚し、偏見や先入観から逃れる努力を怠らないことであるが、このような自覚を促すためにも、データに基づいた社会科学研究の知見を広めることも重要であろう。また、妻よりも夫が稼ぐことが社会規範となっている日本社会において、男性保育士を増やすためには、保育士の給料を上げることが先決である。女性の保育士においても主な離職理由が給料の低さであるほど低すぎる給料では男性保育士が増えるはずはない。したがって、幼児教育・保育政策への投資を増やすことが重要であるが、性差別や児童の権利といった人道的観点からの議論だけでは、その重要性が理解されにくいのが現状である。そこで、経済的な観点からの議論を取り入れることも有効かもしれない。少子高齢化という人口構造変化のもとで経済成長を維持するためには、女性の労働力率を引き上げる必要があり、そのためには保育制度の充実が必要である、といった議論が諸外国ではなされている（池本, 2011）。労働経済学分野の研究では、教育は個人の所得や労働生産性を伸ばすための「投資」として捉えられ、特に就学前教育への投資の効果が大きいことが示されている（大竹, 2009）。幼児教育・保育政策への投資は、乳幼児自身やその保護者だけでなく、社会全体の利益になるということを認識することが重要である。

また、保育や教育の中で、ジェンダー・ステレオタイプを助長しないよう留意することが地道な（かつ今すぐ始められる）方策として挙げられる。保育者や教育者のステレオタイプ的な態度によって、子どもたちがジェンダー・ステレオタイプを獲得していくことを示す「隠れたカリキュラム」に関する詳細な議論は他の文献に譲るが（e.x., Golombok & Fivush, 1994; 三村・力武, 2006; 佐藤・田中, 2002; 矢野, 2019）、「男子には青、女子には赤」など、不必要に性別カテゴリーを用いたり、「男

の子なんだから、泣かない」などといった声かけをしたりすることは、無意識のうちに子どもたちにステレオタイプを刷り込んでいくことになる。保育士は、自身が刷り込まれてきたジェンダー・ステレオタイプを自覚し、それを極力子どもたちに見せないよう努力すべきである。さらに、保育士間においても、男性保育士は「男性らしい保育」を求められるといったことは聞かれるが（今津，2018）、「男性らしさ」というステレオタイプを男性保育士に押し付けることによって、結果的に男性保育士がやめてしまうという事態が起きているとすれば大問題である。保育士を対象とした意識調査で、女性保育士は男性保育士を肯定的に評価しているにもかかわらず、男性保育士にはそのことが伝わっていないことが示されているが（齋藤・平田，2008）、無意識的な（無自覚な）ジェンダー・ステレオタイプの態度（たとえば、保育は男性より女性の方が向いているといった考えなど）が、男性保育士の自己評価を低めている可能性もある。保育士自身がジェンダー・ステレオタイプの再生産を助長し、保育士の仕事の価値を低めてしまうことにならないよう、ジェンダーに敏感な視点をもって保育にあたることが重要であろう。保育現場における男女共同参画の推進が、日本における男女共同参画社会の実現を促進すると考える。

謝辞

本稿の作成にあたり、有益な助言を頂いた武知優子氏（神戸女学院大学・研究所）に、この場を借りて特段の感謝を申し上げる。無論、残された誤りについては、筆者の責にある。

引用文献

- アエラ（2013a）男性保育士のかくも深き悩み「この子のオムツ替えんといてえ」と言われて 6月17日
アエラ（2013b）男性保育士への母の葛藤 パパ以外は絶対イヤ!? 9月2日

- 青野篤子・金子省子（2008）保育にかかわる保護者のジェンダー観 日本家政学会誌, 59, 135-142.
- 朝日新聞（2017）男性保育士を応援、孤立防ぐ環境整備 千葉市、この性別によらず関与 2月2日 朝刊
- 千葉市（2017）千葉市立保育所男性保育士活躍推進プラン 2017年1月〈<https://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/unei/documents/danseihoikusi.pdf>〉（2019年11月29日）
- 江上園子（2007）“母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響—職業要因との関連— 心理学研究, 78, 148-156.
- Golombok, S., & Fivush, R. (1994) Gender Development, Cambridge University Press, New York. (ゴロンボク, S., フィヴァッシュ, R. (著), 小林芳郎・瀧野揚三 (訳) (1997) ジェンダーの発達心理学, 田研出版)
- 池本美香（2011）経済成長戦略として注目される幼児教育・保育政策—諸外国の動向を中心に— 教育社会学研究, 88, 27-45.
- 育鵬社（2016）新編新しいみんなの公民 教科書ワークブック
- 今津太陽（2018）男性保育士の社会をちょっと変えてみた話 ギャラクシーブック ス
- 池上知子（1995）ステレオタイプの認知デモル 愛知教育大学研究報告, 44（教育科学編）, 169-182.
- 厚生労働省（2015）第3回保育士等確保対策検討会 参考資料1 12月4日〈https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidou_kateikyoku-Soumuka/s.1_3.pdf〉（2019年11月29日）
- 久保桂子（2009）フルタイム共働き夫婦の家事分担と性役割意識 千葉大学教育学部研究紀要, 57, 275-282.
- 毎日新聞（2017a）男性保育士「専門職として評価を」千葉市長に聞く 1月30日
- 毎日新聞（2017b）男性保育士おむつ替え、是か非か千葉市長の提起発端 1月31日
- Martin, C. L. (1989) Children's Use of Gender-Related Information in Making Social Judgements, *Developmental Psychology*, 25, 80-88.
- 三村保子・力武由美（2006）保育・子育て実践における「個の尊重」—ジェンダーの視点から再考する— 西南女学院大学紀要, 10, 143-152.
- 大竹文雄（2009）就学前教育の投資効果から見た幼児教育の意義 Benesse 教育研究開発センター『BERD』, 16, 30-32.
- 齋藤正典・平田健朗（2008）保育現場における男性保育者に対する意識調査—男性・女性保育者から見た男性保育者— 盛岡大学紀要, 25, 67-77.
- 作野友美（2008）2歳時はジェンダーをどのように学ぶのか—保育園における性別

男性保育士に対する態度とジェンダー・ステレオタイプとの関係

- カテゴリーによる集団統制に着目して— 子ども社会研究, 14, 29-44.
- 佐藤和順・田中亨胤 (2002) 園生活におけるジェンダー形成の多重構造— 子ども社会研究, 8, 53-64.
- 鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRAS) の作成— 心理学研究, 65, 34-41.
- 竹信三恵子 (2013) 家事労働ハラスメント— 生きづらさの根にあるもの— 岩波新書
- 筒井淳也 (2014) 女性の労働参加と性別分業— 持続する「稼ぎ手」モデル— 日本労働研究雑誌, 648, 70-83.
- 東京都福祉保健局 (2019) 東京都保育士実態調査報告書 2919年5月
- 山田陽子 (2018) ワーキング・マザーの「長時間労働」— 現代思想 (青土社), 46 (17), 137-146.
- 山口一男 (2017) 働き方の男女不平等理論と実証分析— 日本経済新聞出版社
- 矢野円郁 (2019) 小学校教諭におけるジェンダー意識と教科学習能力の性差に対する認識の関係— ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のために— 神戸女学院大学論集, 66, 73-84.

付記

本調査データは、中西佳緒里（神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科 2017年度卒業生）の卒業研究で収集したものである。